
ブラザーシスター

さがの准

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ブラザーシスター

【NZコード】

N4904Z

【作者名】

さがの准

【あらすじ】

半年前に起きた踏切事故。

それ違う二人の恋人。

二人のこころが通じ合つた時、真実が明かされる。

生まれ育った家が、広く感じるようになつた。清々すると思つていた。なにかと口出ししてくる、うるさい相手だった。心はひどく冷え込んでいた。

半年前にあつた踏切事故。心の傷は未だに癒えることなく、闇の中に沈んでいる。一つ、嘘をついた。その嘘を隠すために、もう一つ嘘をついた。そうやって重ねた嘘の重みが、徐々に増していく。いつしか、嘘という鎧が偽りの自分を作り上げていた。

今日もまた、嘘を一つ積み上げる。心の奥底からぎしぎしと軋む音が聞える。終焉の予感がした。

昏過ぎの駅前。街のざわめきに包まれ、自分一人だけとりのこされたような不安に襲われる。

待ち合わせ5分前。彼女は時間通りに来たことがない。待たされることに不満はなかつた。

半年ぶりの再開になるはずだ。『おれ』に気づいてくれるだらうか？

店のショーウィンドウに『』る血分を見る。見慣れない自分に嫌悪感さえ感じる。お気に入りのニット帽は、ポケットの中にしまつてある。

もう一度ショーウィンドウに目を向ける。自分の情けない姿が写り、なんだか馬鹿らしくなつてくる。それでも、彼女が来ないよう願うだけで、いまさら帰る勇気もなかつた。

「あなたが作ればいいでしょ！」

隣で待ち合わせをしていたカップルが、揉め始めた。とつちが料理を作るかで、揉めているらしい。世間では、お嫁さんは料理が上手いほうがいい、と言われているが本当だらうか？ 料理の腕だけ

で結婚相手を決めるのは、軽率だと思つ。男が料理すればいいだけだ。

おれの兄は、三ヶ月ほど前から料理教室に通い始めた。肩身の狭い思いをするだらうと思っていたが、実際は中年のおばちゃんばかり。「お嫁さんが料理出来なくても安心ね」などと、おせつかいを焼いてくるらしい。先月に待望の女の子が入ってきた。童顔ではにかむ笑顔がかわいいらしい女の子だつた。艶やかな黒髪は腰ほどまであり、女らしさを感じずにはいられなかつた。~~おじ~~おじちない手つきで料理を作る姿を見て、料理を作つてもらつのも悪くないなと思つたらしい。彼女が一生懸命作つてくれた料理なら、どんな味でも喜んで食べる自分が容易に想像できたようだ。そんな兄の遅い初恋の前に立ちはだかるのは、やはりおばちゃんだつた。

「あんたどうせ童貞なんでしょう？」初恋は実らないわよ

大きなお世話である。おかげで、未だに話しかけられずについた。

「あ、あのー」

「へつ？」

突然、現実に引き戻され、奇声を発してしまつた。

「才賀さん……かな？」

「そ、そうだけど……」

「は、初めまして！」

ポニーテールが印象的な、眼鏡少女だつた。どこかで見たことがあるような……。

「あっ、間違えた……」「んにちはー！」

知り合いだらうか？

奇妙な既視感の正体を探る様に、顔を覗き込むと、恥ずかしそうに顔を逸れる。半年ぶりで相手に気づけないのは、おれのほうだつた。

「もしかして……や……え……？」

「……えつ」

「雰囲気変わつてたから気づかなかつた」

「……あつ」

彼女とは、付き合つて一年ほどだらう。今日は、彼女から呼び出された。事故で電車が止まってから、一度も会つていなかつた。別に喧嘩していたわけじゃない。電車が止まつても、会おうと思えば会える距離だつた。

ただ、気がつくと半年という月日が流れていた。

部屋にかざつてある一人の写真を思い出す。おれの記憶が正しければ、半年前は鮮やかな金髪だつた。

「なんで染めたの？」

「えつ……あつ……気分転換？」

彼女は自分の髪をまじまじと見つめている。気分転換失敗ということだろうか。思い描いていた彼女のイメージとは違い、ずいぶんと落ち着いて見える

この半年の間に、彼女にどんな変化があつたのだろう。女性が髪を切るのは彼氏と別れたからだと聞いたことがある。なんだかそれに近いものを感じた。「と、とりあえず喫茶店でも入ろうか」側にある喫茶店を指さす。

「は、はい！ ゼひ！」

一秒でも早く、無性に乾いたノドを潤したかった。

脇過ぎの店内は人がまばらで、店員も暇そうにしていた。店員に二人と告げると、おれのうしろをのぞき込んでくる。

「あれ？」

振り向くと、彼女の姿がなかつた。

喫茶店を出ると、彼女すぐに見つかった。隣にある楽器屋のショウウインドウを、熱心に覗いるようだ。

「どうかした？」

「……また、聞きたいです」

「えつ？ あ、ああ…… そうだね」

彼女の不意打ちを受け、適当に相づちを打つてしまつた。彼女はじつと見つめたまま動こうとしない。

「おーい」

「……」

「もしもーし」

「……」

問い合わせに全く応じる様子はない。心奪われ、他の世界に旅立てしまつたらしい。後ろから覗いてみる。

左側には鍵盤、右側には多数のボタンが配置されており、中央は蛇腹になつてゐる。アコーディオンだった。最近はアコーディオンが流行つてゐるのだろうか？

おれの兄もアコーディオン弾いてた時期がある。きつかけは、彼女のいない兄に向けた何気ない一言だつた。

「音楽をやればモテるんじゃない？」

家にあつた唯一の楽器が、アコーディオンだった。普通はギター弾きたがるのだが、粹がつてゐるようで嫌だつたらしい。飽きずに練習を重ね、公園で路上ライブのようなこともしてゐた。足を止める人は物珍しいだけで、歌を聴いている人なんていない。自主制作したCDは一枚も売れなかつた。

結局、目的の彼女を作ることは出来ずにやめてしまった。

そういえば、料理教室の女の子もよく歌を口ずさんでいたらしい。その曲は、世界でも知つてる人が一人しかいないうらい、マイナーな曲だつた。おれの一番好きな曲だつたこともあって、運命的なものを感じてしまう。運命的なんて言葉が出るぐらい、おれの恋愛経験が足りないのは明白だつた。

音楽をやるだけではモテないのは確かだつた。それでも、女性は音楽が好きなことは、間違つていないのかもしねり。

運ばれてきたホットコーヒーを一口飲み、やつと落ち着く。どう

やら彼女のほうが緊張しているようで、むづかしかったことばかりを見ていた。慌てて目をそらしていた。

じつとしているのが、話すこともできない。そんなジレンマに陥っているようだ。

眩しいぐらい明るい店内とは対照的に、重く薄暗い雰囲気が一人を包む。

「……お、お兄さんは元気ですか？」

突然、彼女が口を開いた。

「……才賀さん、お兄さんいますよね？」

おれは二人兄弟で、たしか彼女にも姉がいたはずだ。

「元気だけど……」

「……音楽、続けてますか？」

「その……半年前に止めたけど……」

「そ、そうでしたか……すみません」

そう言って、また黙り込んでしまった。謝る意味はわからないが、俯く姿は落ち込んでいるようにも見えた。このまま黙っていてもしかたない。とりあえず、疑問に思つたことを聞くことにした。
「さんづけなのはなんで？」

「……えつ」

「会つたとき才賀さんって」

おれはいつも呼び捨てにされていたはずだ。名前でなく名前で。才賀という名字がかっこいいらしい。

「その……あつ、久しぶりなので!」

「そんなんだ」

「そうです!」

「……」

「……」

「なんで敬語なの?」

「……だいぶ……久しぶりなので!」

「そんなんだ」

「…………そつなんです！」

「…………」

「…………」

会話が終了した。深海のような沈黙が広がる。世の中の恋人同士は、どうやって会話を続いているのか教えて欲しい。

二人の空気を察するようにアコードィオンの音色が店内に鳴り響いた。彼女の携帯のようだ。携帯を片手にじうらたえ、あたふたしている。

「えつ、あつ！ わ、わたし！？」

彼女は、携帯とおれを交互に見比べるた後、割れ物を扱うよつて元気を鞄の中にしまった。

「出なくていいの？」

「……全然いいです」

「出ていいよ」

「何というか……むしろ出たら負けかなってなぜ遠慮気味なのだろう？ おれの知っている彼女なら、遠慮せずに電話に出るはずだ。薄々感じていた違和感が、徐々に大きくなつていく。

髪の色が変わっていたこと……。

言葉遣いが敬語になつていてること……。

拳動不審な彼女の態度……。

隠した宝物が見つからないように、冷静をよそおつてているような……。ふと、兄の言葉を思い出す。

「携帯電話メールが来ても、その場でみなかつたら浮氣だよ料理教室のおばちゃんから教わつたらしい。料理ではなく、恋愛指南をうけに行つてゐるようだつた。その内容を思い出しながら、順番に当てはめていく

会話への反応・リアクションがうつすい。

髪型や服装の好みが変る。

音楽の趣味や、好きな芸能人が変る。

彼女は見事に当てはまっていた。偶然の一一致かもしだれない。信じたい気持ちが小さく萎んでいく。彼女の反応は、すでに恋人同士のものではないようには思えた。

終わってしまった恋。

別れ、そして失恋。

そんな言葉が頭をよぎる。彼女はもしかすると……。

「……あ、あのー！」

体中から絞り出すような声で切り出された。表情は冷静に装つていたが、彼女の手は震えていた。

「……いるんです」

「……えっ」

耳を疑つた。想像していたとはいえ、実際に言われるとは思つてなかつた。もつと早く気づくべきだつたのかもしれない。半年という時間は、人が変わるために十分な時間だということに。

「会つてほしい人がいるんです」

駅を移動するとき、彼女は電車を一本見送つた。乗らないのか訊くと彼女は「……乘ります」と答える。

その言葉に反抗するように、彼女の足は一步も動かなかつた。罪悪感にさいなまれているのだろうか？　あるいは、同情しているのかもしれない。

不思議なさみしさを感じる一方で、ほつとしている自分がいることに気づく。弱い心に自己嫌悪が込み上げてくる。おれは現実を黙つて受け入れる事しか出来ない。それが、お互にとつて一番いい選択肢に思えた。

空が赤く染まつた海沿いの公園。心地良い潮風を感じながら海を眺める。

『初恋は実らない』

それは本当だろうか？　本当なら、一度は失恋なければならぬ。

好きな人から嫌われる。

想像するだけで、体が切り裂かれるようだった。傷を回避するには、恋をしなければいいのだろうか？　はじめて恋をする人は、避けて通れない道なのだろうか？

「……かぜ、気持ちいいですね」

髪をなびかせながらつぶやく彼女の表情から、迷いの色が消えていた。おどおどした印象はなくなり、どこか吹っ切れたようなすがすがしささえ感じられる。

友達以上恋人未満。

そんな線引きをされた気がした。おれの脳内に構築されていた彼女の姿は、どこにもなかつた。

後ろでは、青年がギターをかき鳴らしていた。おれの気持ちを代弁するかのように、がむしゃらに歌っている。立ち止まっている人はいない。その不格好ながら真っ直ぐな姿は、忘れてはいけないにかを訴えているように見えた。そのせいか、とても居心地が悪かつた。

「わかりますか？　彼が歌う理由……」

おれの考えを読んでいるかのように、彼女が訊いてくる。真つ先に浮かんだのは『女の子にモテるために』だったが、瞬時に考えを書き消す。

「歌を聴いてほしいから……」

「……違いますよ」

子供に教えるような優しい口調だった。

「……知つてほしいんだと思います」

「……自分はここにいるってことを」

「……だから一人でもいいんです」

「……たつた一人でも気づいてもらえたなら、彼は救われるんです

誰に向けるわけでもなく、ささやく彼女の表情は、どこか寂しげだった。それは同情や慈悲といったものではなく、純粹に心からわ

き出た感情のように思えた。

「……行きましょうか」

そう言って、彼女はその場を後にした。

派手なネオンサインで装飾された、無数の看板。建物の入り口は照明が落とされ、異様な雰囲気を漂わせている。通りゆく人々はカップルばかり。一目をばかばかず、いちゃいちゃと特有のムードを漂わせている。この場所に立っていることが不思議でしかたない。ラブホテル街。空想上の建物だと思うぐらい、縁の無かった場所。こんな形で来ることになるなんて思わなかつた。これが、彼女にとっての贖罪なのだろうか。彼女は迷いを振り払うように先頭を歩く。質問は一切受けつけない。そんな意思を強く感じた。

線路沿いの道をひたすら歩く。彼女は罪滅ぼしのつもりなのかもしない。せめてもの償いとして自分の身を捧げる。彼女の覚悟の大きさを感じるには十分だつた。

彼女の行為を受け入れることはできない。彼女が別れたいというなら素直に受け入れる。別れる代償に体を売るようなことをさせたくはなかつた。

彼女の決心は固いように思える。彼女自身がそうしなければ、納得できないのかもしれない。彼女を傷つけずに断るには、どうすればいいのだろう？ ここまで覚悟を決めた人間を、説得する自信がなかつた。

突然、彼女が立ち止まる。

「ここです」

そこはホテルの入り口ではなかつた。だれか待つているわけでもない。立っているのはおれと彼女の一人だけ。道ばたには、いくつもの花束が供えられていた。

そこは半年前の事故現場だつた。

静かに手をあわせる。花束の他にもぬいぐるみやたばこ、CDまで供えてある。彼女が供えてあつたCDを手に取る。いかにも手作りといった、安っぽいジャケットのものだった。

「彼女は、この曲が好きだつたんです」

「彼女は、昔から人見知りの激しい子でした……」
「友達の輪にも上手く入れなかつたみたいです……」
「わたしは、何もしてあげられませんでした……」
「気づいてあげることも出来なかつた……」
「彼女が思い詰めていたことに……」
「自殺しようと考えていたそうです……」
「人生最後の散歩に選んだのが、あの公園でした……」
「その時、この人の歌を聴いたんです……」
「この人は、アコーディオン弾きながら歌つていました……」
「お世辞にも上手くはありませんでした……」
「誰か聴かせようとしているわけではないようでした……」
「ただ、自分の想いを真っ直ぐにはき出しうるだけです……」
「彼の歌に立ち止まる人は、一人もいませんでした……」
「だけど、彼の後ろで一人だけ聴いてる人がいました……」
「彼女です……」
「だれも聴いていないその歌は、彼女に届きました……」
「自分の代わりに叫んでくれる……」
「自分と同じ想いを持つた人が他にもいる……」
「それが彼女の心に響いたんですね……」
「彼女は命を救くられたんですね……」
「それから、何度も彼女はこの人の歌を聴きに行つてました……」
「彼の見えないところで聴いていたそうです……」
「彼女は、この人のおかげで、あなたと出会つことが出来たんですね……」

彼女は、CDを花束に立てかけた。

「このCDは、記念すべき最初の一枚なんだそうです」

「Jの人はすごく驚いていました」

「誰も聴いていない曲を欲しがる人なんて、いるとは思ってなかつたんでしちゃうね」

「記念にと無償で譲ってくれたそうです」

「その時も、彼女はずっと俯いていました」

「恥ずかしくて、顔が見れなかつたなんていうんですよ」

「ほんとは、お礼を言わないといけないぐらいなのに……」

「思方が追いつかない。寒気が身を震わせ、鳥肌が立つのがわかつた。」

「君はいつたい……」

「……も、申し訳ないです！」

突然、頭をさげ謝る彼女。彼女は掛けていた眼鏡をCDの横に置き、結つっていた髪を下ろした。

「なつ……」

「お姉ちゃんの紗直なんですよ！」

「……」

声にならない。

紗直……。

知つている名前だつた。

「このままじやいけないってわかつてたんです……」

「早く伝えなくちゃつて……」

「でも、どうしても言い出せなくて……」

「もう誰も悲しませたくないくて……」

「だけど、ほつとくわけにもいかなくて……」

「それに、妹から何かあつたらよろしくって言われてたし……」

「あとつ、あとつ……」

素になつた彼女を見て、ついつい笑つてしまつた。

「ふえ？」

不思議そうにきょとんとしている。

「別に怒つてないから」

「そ、なんですか？？」

感じていた違和感の正体。無理やりはめたピースがばらばらになり、元の形に組み上がる。今日初めて会ったはずの彼女に感じた、奇妙な既視感。料理教室の女の子が口ずさむ、世界で一人しか知らないはずの歌。わかつてしまえば、実に簡単なパズルだった。

「あ、あの！ この曲、すごくいい曲なんです！」

「私も大好きなんです！」

「あっ、でも……公園には来なくなっちゃって……」

「もう音楽止めちゃったのかも……」

「また聴きたいんですけど……」

誰も聴いていない曲に耳を傾ける少女。そのことを知らずに歌い続けていた。誰にも届いていないと思っていた歌は、届いていたんだ。それだけで救われた気がした。

ひとつの言葉が、歌うきっかけをくれた。

ひとつの歌が、一人の少女を救つた。

ひとつの遺書が、彼女との出会いをくれた。

今、この歌を必要としている人が目の前にいる。歌おう。ニット帽をポケットから取り出す。

たつた一人のために……いや、三人か……。最愛の人と共に旅立つた、二人のためにも……。

今朝供えた花の前で、『俺』はまた歌い始める。

『おれ』がまとつた鎧は、もう必要ない。

『俺』の足で立ち、『俺』の曲を、偽りのない『俺』が歌う。初恋の相手に、想いが届くことを祈りながら……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4904z/>

プラザーシスター

2011年12月16日19時51分発行